

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

## <論文>いわゆる「ら抜き言葉」の現況とその考察

著者	船木 久範
雑誌名	日本文学誌要
巻	65
ページ	117-127
発行年	2002-03-24
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00020206">http://hdl.handle.net/10114/00020206</a>

# いわゆる「ら抜き言葉」の現況とその考察

船 木 久 範

## はじめに

### 1、「ら抜き言葉」とは

最近、「日本語が乱れている」としばしば耳にするが、その中で最も注目され「有名」な現象が、いわゆる「ら抜き言葉」の普及であろう。「ら抜き言葉」とは、力行変格活用動詞および上一段・下一段活用動詞の未然形に、本来は「られる」が接続すべきところ（例…「見られる」）を、「ら」の落ちた「れる」が接続して可能を表現する語法といえる（例…「見れる」）。この表現は、五段活用動詞から派生する可能動詞と体系的に均整な状態を作り出すことから、一段系活用動詞から派生する可能動詞、一段系可能動詞ということもできる。

このような点からは「ら抜き言葉」は誤用表現どころか充分正当性と体系的性を持つ表現といえることになるが、今回はそういった賛否を論じようとするのではなく、最近、実際に使われ

た「ら抜き」表現を見ることです。その現況を把握し、さらに先行研究などで指摘されている「ら抜き言葉」の特徴と対比することで変化や相違を見出し、「ら抜き言葉」の現在の姿を浮き彫りにしたいと考えている。

### 2、先行研究等の指摘

この「ら抜き言葉」について最も早い段階で指摘したのが、中村通夫「「来れる」「見れる」「食べれる」などという言い方についての覚え書」（『金田一博士古稀記念・言語民俗論叢』所収、三省堂、一九五三）である。「ら抜き言葉」の昭和初期の使用状況や特徴などを記し、「ら抜き言葉」に関する基礎資料であると同時に、現在においてもそのまとまった考察には見るべき点が多いと考える。その指摘を大まかにまとめておくと、(1)否定形に多い(2)一音節語幹動詞に多い(3)初期段階では書き言葉に現れないと捉えていた(4)改まった場では使わない(5)老年層は好まない(6)方言(7)教養層から現れた(8)られ敬語使用者層と重

なる、などとなる。

そのほか、文化庁編『国語審議会報告書20』（大蔵省印刷局、一九九六）が今後の動向を見守るべき点として挙げた、一段動詞全体への視点、語形の長さ、活用形での相違などを合わせて「ら抜き言葉」の現況を考察する指針としたいと考えている。

### 3、調査方法と狙い

調査手順としては、まず、文芸誌・漫画誌・TV番組を対象に「ら抜き言葉」の出現例、出現数を調べることで、その現況を見出す。その際、本来の言い方である「られる可能」、すなわち一段系活用動詞に可能な「られる」が接続した表現、の使用例と対比するのも有効な方法と考え、適宜考察を加える。それから随時、上記の中村論文や国語審議会の指摘、すなわち①肯定形と否定形②一音節語幹動詞と多音節語幹動詞③書き言葉（文字資料）と話し言葉（音声資料）④一段系動詞全体の体系性など、を現況と対比検証することで「ら抜き言葉」の性質の変化と現在の特徴を見ようと思う。その他、使用場面・使用者層・地域差なども見たいが、今回の調査対象からは明確なデータが得られない可能性が高い。

語彙別に集計する場合、肯定形・否定形、活用形での違いは考慮していない。つまり、「来れる」「来れない」「来れた」など全て「来れる」型として捉える。また、同一語での、平仮名や漢字など表記上の違いも別語としては扱わない。「これる」は「来れる」型に、「下りれる、降りれる」は「降りれる」型に、含めたということである。図表中の表示は動詞語幹のみの

ことが多いが、例えば「来」ならば「来れる」型を意味する。

#### 1. 文芸誌〈文字資料〉

調査対象は、『文藝界』（文藝春秋）、『群像』（講談社）、『オール讀物』（文藝春秋）、『小説現代』（講談社）の各誌、二〇〇〇年一月号から十月号までの各十冊、計四十冊の、広告等を除く本文全頁とする。

#### 1、「ら抜き」例からの考察

図1-1が「文芸誌の語彙別「ら抜き言葉」出現数」である。

ここから見て取れる第一のことは、四誌いずれも「来れる」型が他の語よりも多く、全体の総数としても、「来れる」型の比率は七一・六％に達することである。「来れる」型に次ぐ「見れる」型の比率は九・〇％と一割にすら達せず、七割を越える「来れる」型の「ら抜き」例の出現頻度は一語だけ飛び抜けて高い。

図1-1 文芸誌の語彙別「ら抜き言葉」出現数

動詞語幹	来	見	着	食べ	付け	出	起き	居	得	寝	追いか	合計数
文 学 界	6	1		2	1	1	1					12
群 像	3	2	1					1				7
オール讀物	24	2	2	1					1			30
小説現代	15	1								1	1	18
合 計 数	48	6	3	3	1	1	1	1	1	1	1	67
比 率 (%)	71.6	9.0	4.5	4.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	100.0

第二は、一音節語幹動詞の「ら抜き」例が多いことである。「来れる」「見れる」型の二語で全比率の八割を越え、一音節語幹動詞の総数では七種六一例、比率九一・〇%を占める。多音節語幹動詞は四種六例と、語の種類(語種)としては「ら抜き」語彙全十一種の中の三分の一を越えるが、出現数の比率では九・〇%にとどまる。

多音節語幹動詞で一例ずつしか出ないものを参考までに挙げておく。

佐藤洋二郎『八月のニクス』(『文學界』二月号)

・「若い頃はいくらでも名前をつけたもんだ」

大道珠貴『スッポン』(『文學界』十月号)

・タマチャン、朝、ちゃんと起きれるひと?

重松清『すいか』(『小説現代』八月号)

・「おっさんもパンツ一丁じゃけん、追いかけれんわい!」

次に、「ら抜き言葉」の出現例を別の基準で再編成した表を見る。

まず図1-2は肯定形・否定形での使用数と比率である。全体で、肯定形が四七・八%、否定形が五二・二%と否定形がやや多いものの、否定形での出現が特徴的とまではいえない。ほぼ半々であるといえよう。

もう一つの図1-3は会話文と地の文との「ら抜き」出現例で

図1-2・肯定形と否定形

	肯定形	否定形
文 学 界	7	5
群 像	3	4
オール讀物	14	16
小説現代	8	10
合 計 数	32	35
比 率 (%)	47.8	52.2

ある。対談中に現れた例は会話文に含めた。ただし、小説作品によつては、地の文に心内文や会話文形式のものがあることもあり、截然と区分しにくい場合がある。前掲の大道珠貴「ちゃんと起きれるひと?」などはその例である。しかし、今回の集計では形式的にカギ括弧や括弧で会話文、心内文としての表示が明確にされていない場合は地の文にカウントしておいた。それでも会話文での比率が六五・七%と高い。

図1-3・会話文と地の文

	会話文	地の文
文 学 界	8	4
群 像	3	4
オール讀物	19	11
小説現代	14	4
合 計 数	44	23
比 率 (%)	65.7	34.3

ここまでは「ら抜き」例自体に注目し、今後も「ら抜き」例のある作品を中心にみていくことになるが、その前に文芸誌全体に視点を広げて、「ら抜き」例を含む小説作品の、全小説数からの比を見ておきたい。小説に限定するのは、文芸誌の中心作物であると同時に、ミニエッセイなどのように長短の差が大きいものまで数に入れるのを避けるためである。連載作品は各月掲載分を一本と数えてある。

その結果、「ら抜き言葉」が使用された小説作品は全五百六十八作品中四十七作品、比率八・三%となる(図1-4)。つまり「ら抜き言葉」を扱っていくというものの、九割以上の作品で「ら抜き」例が現れることはなく、

図1-4・「ら抜き」使用小説作品数

	総作品	使用作品	比率(%)
文 学 界	89	8	9.0
群 像	107	6	5.6
オール讀物	188	22	11.7
小説現代	184	11	6.0
合 計 数	568	47	8.3

「ら抜き言葉」を含む作品そのものがかなり稀な例でしかないという前提を確認しておく必要がある。

## 2、「られる可能」と「ら抜き言葉」との対比からの考察

「ら抜き言葉」が出現する全作品（エッセイ・対談等含む）内の「られる可能」をも集計することで、各作品、各作家の「ら抜き」化の傾向を見る。「られる可能」をカウントする際、明らかに可能表現と分かる事例が多いが、中には可能と自発・受身・尊敬とが明確に区別できない場合や両様にとれる場合がある。そのときは筆者の判断で可能表現と認識したものを「られる可能」としてカウントした。

「られる可能」（表中略称「られ可」）と「ら抜き言葉」との出現数の比（図1—5）は三二四・六七五・一で、「ら抜き」比は一七・一％となる。各誌ごとに見るとややばらつくが、『群像』で低く、『小説現代』で高いので、純文芸誌系の二誌（『文藝界』『群像』）の方が、大衆文芸誌系の二誌（『オール読物』『小説現代』）より、「ら抜き」比がやや小さいという傾向

図1—5・「ら抜き」使用作品内「られ可」「ら抜き」比

	使用作品	出現数		ら抜き比(%)*	異なり語種		ら抜き化率(%)**
		られ可	ら抜き		られ可	ら抜き	
文 学 界	9	50	12	19.4	26	6	23.1
群 像	6	84	7	7.7	28	4	14.3
オール読物	25	130	30	18.8	35	5	14.3
小説現代	17	60	18	23.1	30	4	13.3
全 体	57	324	67	17.1	60	11	18.3

\* 「ら抜き」比 = (「ら抜き」数) ÷ (「られ可」数 + 「ら抜き」数) × 100

\*\* 「ら抜き」化率 = (「ら抜き」種) ÷ (「られ可」種) × 100

になる。

異なり語彙の種類では、全六十種の一段活用系動詞で「られる可能」が現れ、十一種の動詞で「ら抜き」例が現れた。つまり六十種中十一種の動詞で「ら抜き」化した例があると捉えられ、「ら抜き」化率は一八・三％となる。各誌ごとに見ると、出現数の「ら抜き」比とは逆に純文芸誌系で「ら抜き」化率がやや高くなっている。これは、大衆文芸誌系の方が作品数も多く、多様な語彙で可能表現がなされるが、その中で「ら抜き」化する語は限られているというを示すであろう。大衆文芸誌系では純文芸誌系の倍以上の「ら抜き」出現数があるにもかかわらず、「ら抜き」語種の数ではほとんど変わらないことを見ても分かる。既に指摘したとおり文芸誌では全体的に「来れる」型が多用されているが、特に大衆文芸誌系二誌の「来れる」型の占有率は八割を越す（図1—1参照）。このことから、純文芸誌よりも大衆文芸誌の方が「ら抜き」使用は広まっているといえるが、「ら抜き」化するのは特定の語彙に限られ、体系的移行までには到っていないということになる。

作家ごとに集計し直すと、ここでも「ら抜き言葉」使用者ばかりに注目せざるを得ないが、実際には「ら抜き言葉」を一度も使用しない作家の方が多い（小説掲載作家全百九十人の内百五十五人、八一・六％が不使用作家）。図1—6は、「ら抜き」使用者（エッセイスト、対談話者含む）の「ら抜き」使用数、「ら抜き」化した語種の数、「ら抜き」化した語彙、「ら抜き」

図1-6・「ら抜き」使用者の「ら抜き」例、主要「られる可能」、両用語一覧

作者話者名	ら抜き	語種	ら抜き使用語彙	主要られ可 使用語彙	両用	作品種類
大道 珠貴	4	4	来見食起	出		小説
伊集院 静	3	3	来着得			小説
木田 勇	3	2	来2寝	見		エッセイ
馳 星周	6	1	来6	見着出		小説
西木 正明	4	1	来4	見得		小説
高橋三千綱	3	1	来3	来出	来	小説
黒岩 重吾	2	1	来2	見得		小説
清水 義範	2	1	来2	来	来	小説
藤堂志津子	2	1	来2	来食得	来	小説
中井 佑治	2	1	来2	見食		小説
永倉 萬治	2	1	来2	寝		小説
福島 次郎	2	1	来2	来見寝	来	小説
福井 晴敏	2	1	見2	見出得	見	小説
会田 晃司	1	1	来	来	来	小説
宇月原晴明	1	1	来			エッセイ
金城 一紀	1	1	来			小説
鴨志田 穰	1	1	来	食出		エッセイ
北森 鴻	1	1	来	見得		小説
黒川 博行	1	1	来			小説
さいとうたかを	1	1	来			談話
白石 一郎	1	1	来	食寝		小説

作者話者名	ら抜き	語種	ら抜き使用語彙	主要られ可 使用語彙	両用	作品種類
曾野 綾子	1	1	来	見食		小説
高田 文夫	1	1	来			エッセイ
高橋 克彦	1	1	来	来見食得出	来	小説
高橋源一郎	1	1	来	見食		小説
中蘭 英助	1	1	来	見		小説
中場 利一	1	1	来	出		小説
西村京太郎	1	1	来	見食出		小説
東野 圭吾	1	1	来	見		小説
三浦巳一郎	1	1	来	得		小説
光岡 明	1	1	来	見		小説
夢枕 獏	1	1	来	食出		対談
江波戸哲夫	1	1	見			小説
高木 芙羽	1	1	見	来出		小説
李 恢成	1	1	見	見出	見	小説
小島 信夫	1	1	着	見		小説
中村うさぎ	1	1	着			対談
坂東眞砂子	1	1	食			小説
矢作 俊彦	1	1	食	見食	食	小説
福田 和也	1	1	出			対談
赤坂 真理	1	1	居	居	居	小説
佐藤洋二郎	1	1	付け			小説
重松 清	1	1	追いか	見食出		小説

化しやすい語でありながら「られる可能」で使用された語彙、「ら抜き」でも「られ可」でも使用された「両用」語彙、それに出現した作品の種類を掲げたものである。

「ら抜き」使用作家の中でも、二種類以上の語で「ら抜き」化する人は三人しかいない。大道珠貴は最も多い四種で「ら抜き」化している。「起きれる」型は前掲した。

・ユメ見れた。

・『裸』、『文藝界』四月号)

・「帰って来れんことなるぞ」

・(『スッポン』、『文藝界』十月号)

・「一個、食べれるかな……」

・(『スッポン』、前掲)

それでも、この作家が体系的に「ら抜き」化していると言い切れないのは、

・どっしりくつろいでいるので、出られない。(『スッポン』、前掲)

のような、一音節語幹動詞でも「られる可能」が残存していることによる。

伊集院静は三種で「ら抜き」化し

ているが、動詞「見る」に「られる可能」も「ら抜き言葉」もなく確定しがたい。図I-6中の「主要「られ可」使用語彙」の項が空欄となつていても、「られる可能」を使用しないわけではなく、伊集院静の作品内にも「忘れられる」「捨てられる」型などの「られる可能」は出ている。

次に、種類の語では「ら抜き」化する人を見る。この中には、潜在的には他の語でも「ら抜き」化するが、今回の対象範囲では種類の語での「ら抜き」例しか出ていない人が含まれている可能性がある。特に「来る」「見る」などの語で「ら抜き」例も「られる可能」もない人の場合、実際にはもう少し体系的に「ら抜き」化しているかもしれない。

馳星周は「ら抜き」の六例がすべて「来れる」型で、「られる可能」としては「見られる」「着られる」「出られる」型が出ている。このような「来れる」型のみで「ら抜き」化し、他の語では「られる可能」を使用する人は、両用する作家も含めて、「ら抜き」使用者四十三人中二十八人いた。

一方、「来られる」型を使用しながら、他の語で「ら抜き」化するのは、ただ一人、高木美羽『眠りにつく瞬間に思いだす出来事』（『群像』三月号）の、

・こちら側の世界にたやすく戻ってこられるはずだった。  
・この火花を意志的に見ようとしないうつは見たくても見れないやつは、

という例しかない。これはつまり、大抵の場合、「ら抜き」化は「来れる」型から始まるということを意味していると考えて

よいのではなからうか。逆にいえば、「来られる」型使用者のほとんどは「ら抜き」化しない言語感覚を持っていると捉え得るほど、動詞「来る」は作家の「ら抜き」化の動向を見る鍵語となつているということになろう。

さらに最も注目値すると思われるのが、同一語で「られる可能」も「ら抜き言葉」も使用する、つまり「両用」する人である。この中で、単純に「ら抜き」化の定着途次段階で、「られる可能」と「ら抜き言葉」を併用する、まさに個人的な「ゆれ」の段階にある場合はそれほど問題ではない。問題は、「ら抜き言葉」の誤用意識や現代語の「乱れ」としての顕在化に伴い、言語意識の強い作家が、「ら抜き言葉」の若者言葉としての位相語的な面に着目して、その会話文中に意識的に「ら抜き言葉」を用いているのではないかと考えられるような場合である。作家の意識的な使用か無意識的な使用かの差を文章だけから判断するのはやや困難な場合があるが、会話と地の文との使い分け、会話でも発話者の年齢などによって使い分けがある場合は、作家が意識的に使用している例と見ることも可能ではなからうか。そしてこれは、後章でも触れるが、作家自身が「ら抜き言葉」を使用する言語感覚を持つているかどうかではなく、現代語に対する問題意識が高いかどうかに関わっているという点で、「ら抜き言葉」の現在置かれた状況や現代的性格の一端を示す現象であらうと思われる。

図I-6の「両用」の項に語彙が示されている十人が両用作家である。その中で、会話文でも地の文でも「ら抜き」例が現

れる高橋三千綱、藤堂志津子、福島次郎や、両方とも会話文で現れるが、発話者による使い分けを看取できない清水義範、逆に両用とも地の文で出る赤坂真理は、意識的使用と断じることはいできない。高橋克彦と李恢成は、一本の作品内ではなく数号離れて、「ら抜き言葉」と「られる可能」が出た例であった。その場合も使い分けの可能性があるが、特に、一本の作品内で両用された、つまりあまり差のない執筆期間内に両用された、福井晴敏『断ち切る』（『オール讀物』九月号）での、

・将棋番組は見られなくなるのだが、

（地の文）

・「テレビなら下でも見れんでしょ」

（会話文）

会田晃司『グレイブ・ディッガー』（『小説現代』十月号）での、

・骨掘りで食べてこられたのも

（地の文）

・「これのおかげで生き抜いてこれたの」

（会話文）

などは、地の文と会話文とで使い分けをしている可能性がある。これは、話し言葉で「ら抜き」化が進んでいるという現象に作家が応じたものと見られる。

さらに、矢作俊彦『ららら科学の子（第十八回）』（『文学界』七月号）の、

・「両方食べられるのか？」と彼は訊いた。

「食べれないよ。残せばいいじゃん」

となるとかなり明確に使い分けがなされていると感じられる。いずれも会話文内であるが、前者の「食べられる」は中年男性が発話者で、現代日本の情勢・流行に疎い設定となっている。後者の「食べれない」は現代の女子高生が発話者である。世代

差での使い分けの例と見てよいのではなからうか。なお、この作品の六月号掲載分には「私的（わたしで）き）には」と言った女子高生に、この男性が疑問を持つようなシーンもあり、この作家は現代語に関心を示していると思わせる面がある。

このような使い分けの早い例としては、井上史雄が、「ら抜き言葉」の方言起源的な面を論じる中で、川端康成『雪国』（一九三五四七）の「ら抜き」例を「地元芸者のことばだから、一律に扱えない」（『日本語ウォッチング』岩波新書、一九九八。九頁）として、川端が北陸方言を映したと示唆するような指摘をしたことが思い出される。これに従えば、川端が地域差を利用した使い分けを行なったようにとれるが、実際には地の文でも「ら抜き」例が現れているので、たしかにその方言話者以外の作家が方言を利用したという一面もあるが、厳密に使い分けているとまではいえそうもない。

なお近年、「ら抜き言葉」を扱った作品として、島田莊司『ら抜き言葉殺人事件』（光文社、一九九一）や永井愛の戯曲『ら抜きの殺意』（而立書房、一九九八）がある。これらも作家の「ら抜き言葉」への関心から作られたものであることは間違いないだろう。永井は「あとがき」で「ら抜き言葉」使用への抵抗感を記し、作品内では「ら抜き言葉」を使用しても、「ら抜き」化した言語体系を持つていないわけではないことを証している。



最後に文芸誌全体へ再び視点を広げ、主要な語彙での「られる可能」と「ら抜き言葉」の使用小説作品数の比を見ておく(図1-7)。

「来られる」型と、最も「ら抜き」化しやすい「来れる」型と、それぞれの現れる作品数を見てみると、「来られる」型使用作品数・「来れる」型使用作品数Ⅱ六四・三三・二一である。三作に一作は「来られる」型ではなく「来れる」型が現れている。しかし「来れる」型は圧倒的に「ら抜き」化が進んでいる特徴的な語彙であるにもかかわらず、三分の二は「来られる」型が残っているという見方もできる。ただ、「ら抜き」例を含む作品の出現率は一割に満たない(図1-4参照)中では、やはり「来れる」型の「ら抜き」化は進んでいるといわざるを得ない。「見る」「食べる」は九割以上の作品で「られる可能」の「見られる」「食べられる」型が使用されている。「着る」については、実例が少なく確定的なことはいえないが、「ら抜き」化が比較的早く進んでいる可能性もある。

図1-7・主要語彙の「られる可能」「ら抜き言葉」使用小説作品数

動詞語幹	来		見		食べ		着	
	られ可	ら抜き	られ可	ら抜き	られ可	ら抜き	られ可	ら抜き
文 学 界	9	5	16	1	8	2	1	0
群 像	11	2	17	2	7	0	1	1
オール讀物	24	17	34	2	15	1	4	1
小説現代	20	9	23	1	7	0	0	0
合 計 数	64	33	90	6	37	3	6	2
ら抜き作品比	34.0%		6.3%		7.5%		25.0%	

#### IV. 現況のまとめと考察

(注) 本稿では、漫画誌・TV番組についての記述は省略したが、参考参照の便宜のために結果のみ下掲(図IV-1)する。

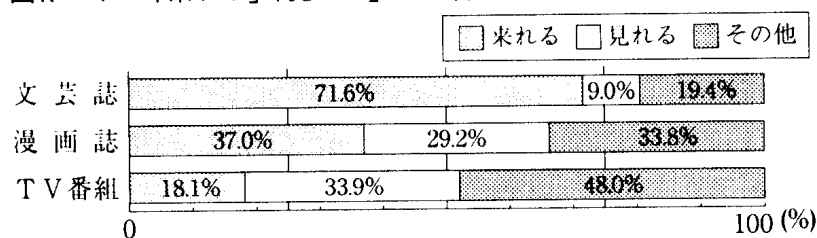
##### 1、「ら抜き言葉」の現況のまとめ

文芸誌・漫画誌・TV番組の全「ら抜き」出現比率(図IV-1、図IV-1')で見ると、つねに「来れる」および「見れる」型の二語が上位を占めるように、「ら抜き言葉」といっても語彙の分布としてはかなり使用頻度の高低に偏りがあつたといえる。それは逆の視点から見ると、他の語での「ら抜き」例は相対的に少ないということである。そうはいっても、文芸誌、漫画誌、TV番組の順に、「来れる」+「見れる」型の「ら抜き」例の比率が下がっ

図IV-1・全「ら抜き」出現比率(%)

動詞語幹	来	見	出	食べ	寝	着	その他	
文 芸 誌	71.6	9.0	1.5	4.5	1.5	4.5	7.5	100.0
漫 画 誌	37.0	29.2	12.0	3.6	5.2	3.6	9.4	100.0
T V 番組	18.1	33.9	9.4	15.0	7.1	3.1	13.4	100.0

図IV-1'・「来れる」「見れる」の出現比



てきている。それは会話性が強くなるほど、多様な語彙で「ら抜き」例が出、語彙ごとの出現の偏りが少なくなっていることを示すであろう。

今回「ら抜き言葉」を集計してきた中で、最も現代的な特徴を示していると思われたのが、作家による意識的使用が見られたことである。中村論文にも指摘され、文化庁の『国語に関する世論調査』（大蔵省印刷局、一九九五）などのデータからも、「ら抜き言葉」は若者が多く使う傾向にある言葉といえる。さらに「ら抜き言葉」が現代語の「乱れ」として取り上げられるようになって問題が顕在化してくると、言語意識の強い作家は「ら抜き言葉」を若者の発する言葉として意識的に利用していると見られる場合があると捉えられた。その場合、作家が自身は「ら抜き言葉」を誤用表現と考えていても作品上には使用しているの、「ら抜き」例の集計がそのまま実際の「ら抜き」化の傾向をあらわしているわけではないということになる。しかしそういった意識的使い分けをされることがあるといった事象が、現代の「ら抜き言葉」の特徴であり、また現代語の問題として認知された状況を物語っているといえるのではなかろうか。その一方で「ら抜き言葉」を自然に使っているような場面も多々あり、「ら抜き言葉」を、自然に発話し表記もする無意識的使用者と、若者言葉や会話文にのみ使用する意識的使用者の両者が併存するのが現状である。

## 2、先行研究の検証

### ①肯定形と否定形

否定形に多いといわれてきたが、否定形の比率は、文芸誌でこそ五割を越えるが、会話性の強い、漫画誌・TV番組では少数派に転じている（図Ⅳ―2）。しかも今後、肯定形が増えていく傾向にあると推測される事象が②などに関連して存在するので、否定形に多いという傾向は見られなくなっていく可能性が高い。

### ②一音節語幹動詞と多音節語幹動詞

早く多く「ら抜き」化しているといわれてきたが、この点は現在でも同様といえる（図Ⅳ―3）。しかし会話性が強まるにつれて多音節語幹動詞が増えていると見ることはできる。全体としては、数の限られた一音節語幹動詞がひと通り「ら抜き」化すると、今度は様々な多音節語幹動詞へと「ら抜き」化が波及しているという状況であると思わ

図Ⅳ―2・肯定形と否定形

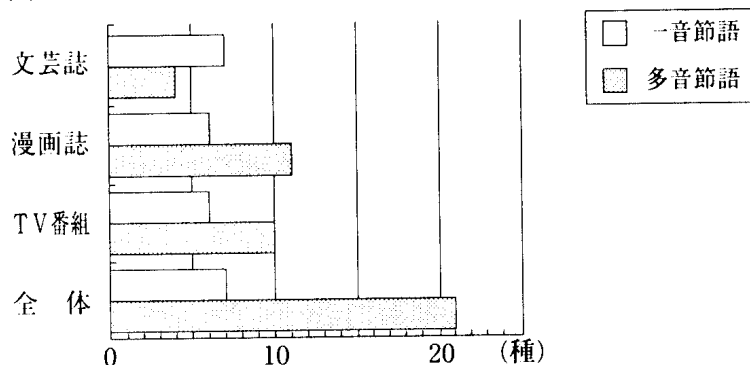
	肯定形	否定形
文芸誌	47.8%	52.2%
漫画誌	59.9%	40.1%
TV番組	61.4%	38.6%

図Ⅳ―3・一音節語幹動詞と多音節語幹動詞

	一音節語	多音節語
文芸誌	91.0%	9.0%
漫画誌	87.5%	12.5%
TV番組	72.4%	27.6%

れる。異なり語彙の種類をくらべてみてもそれは分かる。一音節語幹動詞は七種以内に収まるが、多音節語幹動詞は特定の語に限るわけではなく、様々な語彙に広がっている(図Ⅳ—4)。

図Ⅳ—4・一音節語と多音節語の異なり語種



図Ⅳ—5・多音節語幹動詞の肯定形比率

	肯定	否定	多音節語の肯定比(%)	全体の肯定比(%)
文芸誌	3	3	50.0	47.8
漫画誌	16	8	66.7	59.9
TV番組	22	13	62.9	61.4

③書き言葉と話し言葉(文字資料と音声資料)  
話し言葉で多いといわれてきたが、この点も現在でも同様の傾向にある。文芸誌での会話文と地の文との比(図Ⅰ—3)でも見たが、全体的にも、文芸誌より漫画誌、さらにTV番組と、会話性が強くなるに従って、「ら抜き」比が高くなり、多くの語彙での「ら抜き」例が現れるなど、「ら抜き」化が進む方向にある。否定形の比が低くなる、多音節語幹動詞の比が高まるなどの傾向も見られた。また、作家による意識的使用に関して見たように、会話文は「ら抜き」例を使用する使い分けの対象にもなっている。

#### ④一段系動詞全体の体系的性

②で見たように多音節語幹動詞にも広がり、「ら抜き」化の体系的移行は進みつつあると捉えられるが、その反面、図Ⅰ—5などを見ても分かるように、「ら抜き」化した形の現れていない動詞も多く、「ら抜き」化しやすい語彙に限り「ら抜き」例が多くなってきたというのが現状なのではなからうか。これだけ騒がれている「ら抜き言葉」であるが、実は一段系動詞全体の体系的移行としては、ほんの初期段階に差し掛かった程度でしかないといえそうである。

#### おわりに

「ら抜き言葉」が今後、一段系動詞全体におよぶ体系的整合性を獲得していくのか、それとも誤用意識が残存するのかは分

からない。ただ、ここしばらくは、「ら抜き言葉」を使う人は抵抗なく使うし、使わない人は注意してでも使わない。といって、使用者も時には、あるいは語彙によって「られる可能」を用い、「ら抜き言葉」を誤用表現と思っている人も、意識的に使用する作家のような場合ばかりでなく、全く無意識的に使用することもある。そのような混在状態が続くのではなからうか。

(注) 本稿は、二〇〇〇年度卒業論文の「Ⅰ. 文芸誌」の章を中心に据えて全体を縮約し、「Ⅱ. 漫画誌」「Ⅲ. TV番組」の二章を全文省略したものである。

(ふなき ひさのり・二〇〇一年卒)

#### 寄稿要項

『日本文学誌要』編集部では会員諸氏の積極的な投稿をお待ち致しております。また、フロッピーで入稿される方は、次の二点に留意して下さい。

一、フロッピーをMS-DOSのテキストファイルの状態にすること(ただし、一太郎・ワード等、一般的に普及しているワープロソフトについては、そのままの状態で対応できるそうです。事前に編集部までお問い合わせ下さい)。

二、フロッピーとともに、プリントアウトした原稿を添えること。

次号以降の予定について

論文・四百字×三〇枚程度(規定枚数を大きく越えての

ご投稿はご遠慮下さい)

随想・四百字×六枚程度

×切 ① 四月二十五日(六六号)

② 十二月 十六日(六七号)〔予〕

宛先 〒一〇二―八一六〇

千代田区富士見二―十七―一 八〇年館内

法政大学国文学会 『日本文学誌要』編集部

☎ 〇三―三二六四―九七五二